
その者を追い返せ

歌月 碧威

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その者を追い返せ

【Nコード】

N35490

【作者名】

歌月 碧威

【あらすじ】

＊『その者を引きずり出せ』の続編です。

あれから一年後。

私と魔王は相変わらずの日常を魔界で過ごしていた。

でもそれも魔王が風邪をひいた事をきっかけに、がらりと変わっていく。

騒動に巻き込まれた先で私が出会ったのは、イケメン王子様達。

しかも熱烈歓迎とくれば、今度こそ溺愛・逆ハーコース！？

なんてそんなおいしい話あるはずなく、私は厄介事をたのまれてしま
う。
それは……――

1 それはほんの些細な出来事だった

「――今、なんて言った？」

ついさっき耳に入って来た言葉は、久しぶりのゆったりとしたティータイムをぶち壊すのぐらいのものだった。

そのおかげで、口元まで運んでいたフォークが止まっている。

大好きな苺の甘酸っぱい香りが食欲を誘うが、今はそれどころじゃない。

今問題なのは、さっきテーブル越しに座っている婚約者がしゃべった内容だ。

「美咲は余の話を聞いておらんかったのか？」

そう言って優雅に紅茶を啜っているのは、この魔界きつての魔力の持ち主でこの魔界の王。

つまりは魔王様。

彼は私の婚約者。ちょうど一年前、私はこの魔界に召喚されてきた。理由はただこの魔王を部屋から引きずり出すため。

その時いろいろあって、女神補欠になり魔王の婚約者となったのだ。

「ちゃんと人の話は聞かねばならぬぞ？」

紫色の瞳が優しく私を見つめている。

魔族特有の整った顔立ちに人間界の大抵の子は、落ちるだろう。

だがこいつら魔族は顔だけだ。

だってこいつら魔族はデリカシーがないのだから。

友達がイケメンになら何されても良いって言ってたけど、あれ嘘だね。

この魔界暮らしで何度血管が切れそうになったことか。

ぶん殴ってやりたくなった事も、一度や二度じゃない。ただど一年も経つとちよつと感覚が麻痺してくるから、最初ほどでは無くなったかも。

「聞いてたよ。もうすぐ魔王の誕生日パーティーなんですよ。違うくて、その前。プレゼントのリクエスト内容のこと」

「ああその前か。余は美咲の裸エプロンが見たいと言ったのだ」さわやかにエロ発言すんな。

周りみろよ。人いるだろうが。人が。

テーブルの傍にはワゴンが置かれてあり、メイドが紅茶のおかわりをいれてくれている。

もちろん、このメイドさんも美人さん。

「お前は変態か」

裸エプロンだって？魔王はおっさんかよ！！
言うまでもないが、しない。する筈がない。

大体シリウスとかのだったら見応えあるけどさ。

私？あゝ、無理無理。んな大層な体じゃないですって。

「絶対嫌」

「なぜだ！？美咲！！」

んなもん聞くまでもないだろ。却下だ。却下。

まったく魔界にそんな単語あるのか？もしかして人間界で知ったとか？どちらにせよ、この話は強制的に終わりにして闇に葬り去るからいいや。

……と思ったんだけど、あの男がそうはさせてくれなかった。

「おい」

「何よ？」

めんどいなく。私はため息を吐くと後ろを振り返る。

そこには空と同じ色の髪をした男が立っていた。

耳がちょうど隠れるぐらいの髪の長さに、甲冑と腰にある大剣。

まあ、明らかに職業騎士。

彼の名はラムセ。一応ここで私の護衛を務めている。

魔王は臣下からの信頼も厚い。

一部の間では心酔されているんだけど、まあラムセも残念ながらその一人。

だから――

「御心が広い魔王様がお前のような貧相な体でも良いって言って下さっているんだぞ！！ありがたく申し出を受けろ」

……だから完全に魔王の肩を持つ。

しかも魔族らしく、失礼な発言を平気で言う。

やっかいな事に、こいつら自分が失礼な発言をしたとは思ってない。もうカルチャーショックどころじゃねえし。

「貧相っていうな！！貧相って！！」

椅子が倒れるかもしれないというぐらい、後ろ向きになって椅子から身を乗り出して指を指す。

人に指を指してはいけません。

そう小さい頃教えられたが、今はその教え忘れる事にする。

「ラムセ私の裸見たことないでしょ！！それでも凹凸はあるんだっうの。……一応だけど」

最後が小声なのは気にするな。

でも嘘はついてないよ。だって実際私にだってあるもん。

まあ、シリウスとは比較にならないけど。

「見たことあるわけないだろうが。見たくもない」

「ほら！！ねえ、魔王言ってるよ！！ちゃんと凹凸あるって！！」

なんか自分で言ってる悲しくなってきた。

「ラムセ。余は美咲の胸が小さくても好いておる。それにもし美咲の容姿が整っていれば、美咲という感じがせぬではないか。街に溶け込んでこそ美咲なのだぞ」

「さすが魔王様です」

ラムセは魔王の微笑みに対し、目を輝かせた。

おい。おかしだろ。なぜそうなる？

「人の事さんざんコケにしゃがって、お前ら何様のつもりだ？」

この調子だと、たまに口が悪くなるのもしょうがない。

まあ、わかってたけど。魔王がフォローなんてしない事ぐらいさ。でも少しはなんか別の言い方あるでしょうが。

「――お茶の席中失礼いたします。魔王様」

突然艶のある声が聞こえてきたため、私達は話を止めその場所に全員視線を移す。

するとそこには今話題になっている裸エプロンが似合いそうな、プロポーションを持った妖艶な美女が立っていた。

その美女は私をここに召喚した魔女・シリウス。

毎度の事ながら、歩くたびに揺れ動く胸に目が言ってしまう。

あゝっ！！なんでおっさんっぽい私！？もしかして変態は私かっ！？

「これを」

シリウスはテーブルの上に何か紙で包まれた物を置く。

すると魔王はそれを見て顔を顰めると、手で弾いてしまった。

「飲まぬ」

「魔王様!!」

なんだろう？

私はその包みを見て首を傾げる。

「ねえ、シリウス。それ何？」

「葉草煎じた物よ。魔王様喉が痛いそうなの。おそらく風邪だと思うわ」

「えっ！？大丈夫なの？」

「というか、魔族でも風邪って引くんだ……」

あ。そう言えば怪我とかなら治癒魔法で治せるけど、病気とかなら治せないって聞いたことあるっけ。

「平気だ。葉は飲まぬ。苦いから好きではない」
子供かっ！！大体、あんた2546歳でしょ？
良い年した大人なのに。

「ちよつと、子供じゃないんだからさ」

「嫌な物は嫌じゃ」

「――あ」

そう叫んだ時には魔王の姿はなかった。
あいつ転移魔法で逃げやがったな。

「シリウス」

「無理ね。魔力を隠してるわ」
まったく。あの魔王め。

もすうぐ自分の誕生日パーティーなのに。
酷くなっても知らないんだからね。

——この時の私達は誰も知らなかった。
こんな些細な出来事が、のちにあんな騒動に発展するなんて事を。

2 不穏な足音はすぐ傍までに

荒れてるな……

震えるルルを腕に抱きしめながら、私は窓側に二・三步と足を歩み寄っていく。

どんよりと濁った空に、窓ガラスを打ちつける雨風。そして時折地響きのように鳴る雷。

外はまるで台風接近とでも言うような大荒れの天気。

「ルル、大丈夫だよ。ちゃんと傍にいるから。ねっ？」

腕の中の小さい彼をなんとか安心させようと頭を撫でてみるが、震えは止まらない。

せめて雷止んでくれると、ルルも大丈夫なんだけど。

私はそっと溜息を吐くとまた窓から外の様子を伺う。

ほんのわずか目を離していただけなのに風の強さが、さっきより強くなっているように感じた。

腕の中の小さな存在も心配だけど、私にはもっと心配な人がいる。

大丈夫なのかな？魔王――

私は視線を左壁にある扉に移動させそこに固定させた。

そこは隣にある魔王の部屋と私の部屋を繋ぐ扉。

彼はその室内で今、医師のよる診察を受けている最中だ。

さっきバイトから戻ると、魔王が倒れたと聞かされた。

それを聞いて急いで魔王の元へ行こうとしたけど、診察中だからと止められ、こうして自分の部屋で待機をしている。

熱と咳が酷いって言ってたけど、やっぱり風邪かな？

だからあれほど薬飲めって言ったのに、ずっと逃げてるんだもん……

魔王は元々風邪気味だった。

だから何度か薬を飲ませようとしたんだけど、そのたびに転移魔法で逃げられてしまっていた。

魔王は魔界で魔力が一番強いいため、魔力を隠して逃走した魔王を見つけ出せる人は皆無。

そのため、薬は一度も飲んでいない。

私に魔力があって、魔王より強かったらなく。

そんな風に考えながら扉を見つめていると、タイミング良く控え目なノックが耳に届いた。

それを聞き私はいてもたっても居られなくなり、「はい」と返事をしながら扉の方へと向かう。

「美咲、もう入っても良いわよ」

扉から顔を覗かせたのは、シリウスだった。

「魔王はどうなの？」

「ギルバードの話では、やはり風邪が悪化したらしいわ」
ギルバードってお医者さんの名前だよな。たしか。

「だから薬飲めって言ったのに……」

「そうね、今回は魔王様の自業自得の結果よ。怒ってあげて」

シリウスが体を少し退かして、私を室内へと入るように促す。

私はシリウスに風邪が移ると悪いのでとルルを預けると、足を踏み入れまっすぐ中央に配置されているベットへと向かった。

「……美咲。移るから、余の傍に来るでない」

ベットには魔王が横になっていた。

おでこには冷やしたタオルをのている。

「平気。私、体だけは丈夫なの」

魔王の頬に触れると、いつもじゃ考えられないぐらいの体温だった。

——熱いな。これ結構熱高いよ。

魔王は熱のため色白の顔は赤く色づいていて、こちらを見あげている瞳は潤んでいる。

呼吸もしずらいのか、荒い。

「すまぬ。美咲に言われた通り、始めから薬を飲んでいれば……」

「ほんとだね。人が飲めってあれほ言ってたのに、薬が嫌いだって逃げていた魔王の自業自得。周りにしてみれば、ほんと迷惑な話だよ。また執務溜まっちゃうしさ。ほんとしようがないよね、うちの魔王サマは」

「……すまぬ」

いつもの口調で話したんだけど、どうやら弱っている魔王にはきつかったらしい。

大きな瞳に雫をためたかと思うと、堰を切ったかのように泣き始めてしまった。

もう、泣かないでよ。

魔王は両目を隠すようにして泣いている。

私はそんな魔王の髪をすくようにして撫でた。

「だったら早く良くなって、迷惑かけた分皆に返そうね。もう、薬は飲んだ？」

魔王はほんのわずかだけど、首を縦に動かした。

良かった。薬飲んでくれたみたいで。

私はほっと一安心と胸をなで下ろす。

「こんな軟弱で周りに迷惑をかける余の事嫌いになったか？」

「今さら、こんな事ぐらいでなるわけないでしょうが。もうおしゃべり辞めて少し眠りなよ。――ディアス」

ディアスって言うのは、魔王の名前。

みんな魔王って呼ぶけど、魔王にもちゃんと名前がある。

私にディアスって呼んでほしいらしけど、なんか魔王っていうのがしっくりと呼び慣れているため、なかなか呼べないでいた。

彼はその名を呼ばれた事に対し目を大きく見開いていたが、その後はにかんだ笑みを浮かべた。

「美咲」

「ん？」

横になっている魔王は、右手を私に向かって伸ばしかけている。

私はその手を両手で包むように握りしめた。

「ずっと余の傍に居てくれ」

「うん、いるよ」

「余は美咲がおらぬと狂ってしまふ」

もしかして寂しいのかな？

ほら、熱出すと心細くなっちゃうじゃんか。

だから急にそんな変な事を聞いてくるのかもしれない。

3 女神補欠の位置

「魔王様、なんと御勞しい姿……出来るなら、あの女神補欠がかれればいいのに」

おいっ、そこは自分が代れればいいのにでしょうが。耳に届いてきたその声に、思わず突っ込んでしまう。

まったく。こいつは本当に……

私はタオルを洗面器に浸しながら、半分呆れ返ってその声の主を見つめる。

そいつはベットの傍に立ち膝になり、眠っている魔王を屈んで見つめ居ているような格好をしていた。

いつも私の前では偉そうな顔をしているのに、今は心配しているからか、眉を下げ悲壮感漂わせた表情。

しかも目元はうっすらと涙を浮かべている。

たぶんこいつは私に何かあってもこんな風にはならないだろう。

ラムセがこうするのは、崇拜する魔王様だから。

きっと私が風邪ダウンしても、「お前弱すぎ。魔王様に迷惑かけてんじゃねえよ」と熱で苦しむ私の枕元でグダグタと小言を言うはずだ。

「……ラムセ、美咲が風邪をひいたら可哀想じゃ。この苦しみは余だけでよい」

「なんと慈悲深いお方なんですか、貴方様は」

熱のため息も絶え絶え魔王が告げた言葉に、ラムセ目頭を押さえ始めた。

おい、まさか感極まって泣いてんじゃないでしょうね？

たまになぜここまで魔王に対して崇拜出来るのか理解出来なくなる時がある。

そりゃあ、私だって魔王がすごい人だってわかるよ？

魔力桁違いらしいし。

でもこれっていきすぎじゃない？

なんかラムセの反応に「なんだ、この猿芝居は」とでも言いたくなってくるもん。

「ご安心下さい、魔王様。女神補欠は風邪なんて引きません。ウィルスすらも逃げいきます」

「私は一体何者だっ!!」

風邪はめったに引かないけど、それは引きにくいってだけだっうの。私だって引く時は引くさ。

「お前それより、シリウス達待ってんじゃねえのか？」

「あ、うん」

急に話ががらりとかわってしまい、戸惑いながらもうなづく。

私はこれから自分の世界にスポーツ飲料と栄養ドリンク、それから冷却シートなんかを買いに行く所だったのだ。

タオル変えてから行こうって思ってた所に、ちょうどラムセが来たからそのまま居座ってしまった。

普段あっちの世界とこっちの魔界を魔王に貰った鍵で行ったり来たりする私だけど、今回は魔王の魔力が不安定なため、数人のサポートを受けなければ行き来出来ないんだって。

なんでも魔王の魔力が不安定なため、それを安定させてもらわなきゃならないみたい。

だから私があっちの世界に買いものに行くために、城で力のある者数人をシリウスが集めてくれている。

「じゃあ、私ちょっと行って来るから、ラムセ魔王の事頼むね」
財布片手に行こうとしたら、ラムセに腕を掴まれ止められてしまった。

「ちょっと待て。何一人で行こうとしてんだよ。俺は魔王様にお前の護衛を任されてるんだぞ」

「え、いいよ別に。だってシリウスの所に行くだけだもん。それに特に危ない事ってないし」

「いいわけないだろ。今、代わりの者呼ぶから」

魔王を一人にはしておけないので、誰か代わりを呼ばなければならぬ。

呼び鈴を鳴らそうとするラムセを制す。

「良いつてば。それより魔王についててよ。男手が必要な時あるかもしれないし」

この魔界はいたって平和そのもの。

後宮争いとかないし、私が命狙われる事なんてないもん。

「美咲、ラムセを――」

「平気、平気」

私は魔王の言葉を遮り、「行って来るね」と手を振り、扉を開けて廊下へと出た。

4 後悔はすぐ傍まで

城の廊下は天気がすぐれないためいつもより薄暗く、まだ昼を少し過ぎたばかりだというのに蝋燭が灯されている。

最初ここに住んだ頃からずっと思うけど、なんで城の廊下ってこうも長ったらしいんだろう。

大広間や謁見の間なんかの広い部屋の他に、いろいろな部屋があるから仕方ないっていうのはわかってる。でもこうも広いと疲れるよ。

魔王とかは魔法で使って移動しているから疲れないけど、私は人間のため魔力ゼロ。

そのため体力の消耗が激しい。

最初チャリでも持ってこようって思ったんだけど、廊下に敷かれている赤い絨毯が上等すぎて歩くと靴が沈むぐらいなのでそれはちよつと無理なので辞めた。

それに危ないし。

「あゝ。私も魔法使いたい!!」

誰に言うでもなく独り言を言うと、向かい側からでっかい毛玉がすごい勢いでこっちに向かってくるのが見え足を止めた。

「もふもふ!!」

私はそれに向け手を上げ大きく振ると、その軽自動車一台分はあろう大きなその毛玉は私の声に動きを止めたが、勢い付け過ぎたのか、私を少し過ぎたあたりで急停止してしまう。

ぱつと見その毛玉はクリーム色をしていて、申し訳ない程度に羊のような顔が覗いている。

前足や後足もちゃんとあるが、かろうじて先端が見える程度だ。

「女神補欠様っ!!」

「どうしたの？珍しいね、城の中で会うの」

私はその毛玉——もふもふに触りながら訊ねた。

この人。いや、この魔族・もふもふ事、本名・ロダ。

お仕事は、門番や城外の警備などの主に城外でのお仕事。

だから、こうして城の中で会うのは珍しい。

「それにしても、相変わらずふかふかだね」

この毛刈ったら何人分のセーターが作れるんだろう。

いや、それより布団にしたい。

初めてもふもふに会った時、あまりの衝撃に「毛玉っ!？」って叫んでしまった。

隣りにいた魔王が説明してくれた話では、そういう種族らしい。

だからロダのような人は他にもいっぱいいる。

ただ、なんていう種族か忘れちゃったけど。

私はロダと仲が良いから、そのままもふもふっていう愛称で呼んでいる。

穏やかな性格で時々背中に乗せてくれたりするんだけど、すっげえふかふか。

太陽の下なら最高に爆睡出来る。

「た、大変です。さっき茨の扉の前を通ったら、人影が見えたんですよ!！」

「え？」

大変なのか？というテンポと口調で話すもふもふに、私は彼を撫でている手を休め顔を上げた。

茨の扉っていうのは、魔界とこっちの世界の人間界を繋ぐ扉のこと。扉って呼ばれているけど、見た目は茨のアーチ。

でも、もちろん扉っていうぐらいだからあっちの世界とはもちろん

繋がっている。

通常は空間を歪ませ、あっちの世界とこっちの世界を行ったり来たりするそう。

ただ、今はあの女神のせいとその扉は魔王により封印されている。

——…：…はずなんだけど。

「今、魔王様の魔力が不安定なので、もしもの可能性もありまして」「んゝ。じゃあ、私ちよつと見て来るよ。もふもふは、一応グレイルやシリウス達に知らせて来て」

「ええっ！？危険ですっ！！」

「平気、平気」

あっちの世界からこっちの世界には来る事は不可能に近い事って前に聞いた事がある。

逆なら問題ないけど。

なんでも魔獣が放たれていて、許可のない人間は食べられちゃうんだってさ。

だからもし、もふもふが見たのがあっちの人達であってもこっちの世界には来れない。

来たら喰われる事知ってるしね。

＊ ＊ ＊

「何にもないじゃん」

チャリにまたぎながら私は茨の扉を眺めていた。
城外の森にあるためか、人がおらず辺りは鳥の鳴き声と魔獣の鳴き
声が響いている。

茨は城門ぐらいの大きさの丸いアーチを作っていて、その向こう側
に見えるのはどんよりとした雲に無限に広がる木々。いつも通り異
常なしの光景だ。

もふもふの見間違えじゃないのかな？

私は首を傾げ、扉の上から下をゆっくりと見るが何も異常な点は見
当たらない。

念のため、もう少し近づいて見てみるか。

私はチャリを停め扉のすぐ傍まで近づく。

すると何か目の前の景色が歪んだように見えた。

「えっ!？」

慌てて遠ざかろうとしたんだけど、時すでに遅く、私は扉から現れ
た何者かの手により引きずりこまれてしまった。

5 私の時代到来!?

人間とは自分には都合の良い状況に期待するものだ。

たとえば、よく雑誌とかの占いで、今年は恋愛運が絶好調!! モテすぎて困るかも!?! なんて事書かれているの見た事ない?

普通そんな事書かれてたら、期待する。

そんな事書かれていようものなら、立ち読みレベルの雑誌だったとしてもつい買ってしまうかもしれない。

かもしれないというか、いや買ったな。たしか、一昨年。

結果はうん……人生ってそんなもんだよね。

私だけ除外されてたのかもしれないけど。

そう、期待してた分落差は激しいもの。

だから期待しておかないでおこう。この状況も――

「美咲様とおっしゃるんですか? ご本人だけじゃなく、お名前まで可愛らしいんですね」

「シェイドの言う通りだ。本当に美咲様は可愛いな」

私を挟んで左右にいる見目麗しい王子様達は、私が紅茶を飲むのを見てそう言った。彼らだけじゃない。

私を中心にコの字になるように配置された、装飾の施されたテーブルに座っている他の王子様達も同調の声を上げている。

さっきからやる事話す事全てが全部好意的に受け止められていた。

――キタ。コレ、私の時代っ!!

イケメンに囲まれて褒められる。

そんなシチュエーションに気分が良くなれないわけがない。

気分良すぎてテンションあがりまくり。アドレナリンでまくり。
普段褒められる事に慣れてないし、その上相手がイケメンとくれば
これ普通の反応。

……まあさ、魔王も可愛いって言うてくれる時あるよ？

けど、余計なひと言のせいで全てが無に変わるんだもん。

美咲はウーパールーパーみたいで可愛いとかさ。

そういえばこの間は少しレベル上がって、動物園デート中にカピパラ発言だったな。

私も私で、カピパラなら可愛いし、まあいつかって思っちゃったし。
あの時魔王、「美咲が居ない時に寂しくないように」ってカピパラ
グッズ大量に買い込んだっけ……

魔界での扱いが扱いなだけに、ここでの扱いはお姫様気分。

私はただ今、異世界召喚の異世界召喚をエンジョイ中。

茨の扉から何者かに引きずり込まれた私が辿り着いたのはここ、魔王
王の世界の人間界だった。

あの女神事件で魔王が扉を封印していたんだけど、体調不調のため
魔王の魔力が歪み、ズレが生じ道が繋がってしまったらしい。

その歪みにより生じた異変に、ちょうど扉の護衛をしていた騎士が
発見し彼の手により私は引きずり出された。

もちろん最初は驚いた。

だってさ、甲冑を着たマッスルと目があったんだもん。

これが驚かずにいられるかっていうの。

誰？何？ここ何処？ってわけがわからず、ぼけっとアホずらを下げ
ている私に対しマッスルは大慌て。

すぐさま馬に乘せられ、私はここ——ダルサ城に連れて来られた。

はっきり言って勝手にこっちの世界に連れて来られた私は時間が経

つにつれ怒り心頭だった。

だってさ、おかげで私はあっちから向かえが来てくれるまで戻れないんだよ？

魔王具合悪くて心配なのに……

帰るにもこっちからだとも魔獣に食われちゃうし、空間が歪んでいるため、魔界じゃなくどっか違う世界に行ってしまうかもしれないし。

そんな行き場のない私を、このダルサ城の第一王子・リリクは謝罪の意味もかねて城に好きなだけ滞在して欲しいと申し出てくれたのだ。

私が魔界の客だからか、待遇も最高のもの。

しかも王子自ら話し相手してくれてもてなしてくれた。それだけじゃない。

他国にも連絡がいったのか、他の国の王子様達も続々私に会うために会いに来てくれた。

わざわざ献上品持参で。

期待してはダメだと思っても、期待してしまう。

これってさ、逆ハーフラグ立ってるんじゃない？
可愛いの連呼だし。

なんか、やっと思世界召喚っぽくなってきた。

6 フラグ粉々にへし折られる

「――では、美咲様はいずれ魔王様とご成婚を？」

「んゝ。どうなんだろうね。一応婚約者って事になってるけど」

「美咲様のような方が婚約者なんて、魔王様は御羨ましい方ですね」
「えゝ。そうでもないと思うけど」

とかなんとか一応謙遜して否定言っておいたが、気分は最高潮。

あまりに人に褒められすぎると、自分がそのような人間なんだって
思えてくる。

やばいな、これ。天狗になりそう。
っていうか、もうなってる。

逆ハーの主人公は戸惑ったり相手の気持ちに気づかなかつたりで、

天狗にならなけど私はすっかり舞い上がっている。

もしかして、これって私が非モテだからか……？

いや、違う！！断じて違う。

きつと適応力が高いからだ！！きつとそうだ！！

あゝ。もうなんかもうすっかり気分的には絶世の美女。

こりやあ、紅茶も一段とおいしく感じる。

紅茶を啜る私の頭にはすっかり花が咲いているだろう。

「ところで美咲様」

「何？」

「宜しかったら、美咲様のお姿を拝見させて頂きたいのですが？」

「は？姿？」

何言っちゃってんの？王子ったら。

姿も何も私は平安時代の姫君のように御簾に姿を隠しているわけ
もない。

だから姿を拝見って言ってもさ。

一瞬この人達には私が見えないのか？って思ったけど、容姿褒められたし。

「美咲様は、あの魔王様のご婚約者様。ということは、女神のように美しいお人。」

この世界は魔界と違い、容姿の整っているものばかりではありません。

今のお姿は、我が世界に合わせて頂いていると思うのですが、

僕達はそのような地味な仮の姿ではなく、美咲様の本来の姿を拝見したいのです」

……ちよつと待て。

もしかしてこいつらは私がこの世界で浮かないように魔法か何かで今の姿をしていると思ってるのか？

んで、本来は魔王の婚約者って言うぐらいだから超絶美少女のはずだど？

——んなわけあるかいっ！！私はずっとこの顔だっうの！！

大体魔法も使わずにどうやって姿形変えるのよ！？特殊メイクでもしなきゃ無理だろ！？

ん？ということは、今までの逆ハ―展開だと思っていたのもただのリップサービスじゃね？

つまりは社交辞令って事かよっ！！

「またこのパターン！？」

いきなり立ち上がり叫んだ私を、王子達が目を丸くして見ている。

魔界で慣れたと思ったのに、またこれかよ。

私にはやっぱり逆ハ―展開はないのか。

「え。美咲様はまさか本当にそのようなお顔なんですか!？」

王子達が全員あげた声は見事に重なった。

すげえな、こんなに大人数なのにハモるなんて。滅多にないよ。

私はそのことに関心すら覚えてしまう。

「そうだけど何か？」

「あの失礼ですが、本当にあの魔王様のご婚約者なんですよね？」

「悪かったな、その辺にいそうな地味顔で」

「ほ、本当に申し訳ございません。歴代の妃様達はとても美しい方ばかりだったと伺っていたので……」

「すみませんねえ、歴代妃と違いイレギュラーな者で」

言葉の一つ一つを強調してやった。

それはもう、わざとらしく。

「そんなっ!! 美咲様はとても愛嬌のあるお顔をなさっていますよ!!」

「それ、褒めてねえし」

腕を組み威圧的な声で王子達に問いかけると、彼らの視線が面白いように泳いだ。

ほら、どうしたく? さっきの褒め殺しはどこに行った?

「に、人間外見より中身が大事だと思います!!」

そうきたか。

だが、それには同意する。

魔王だって見た目パーフェクトだけど、デリカシーのかけらもないし。

それに前の女神みたいに、見た目よくても悪女って事もあるもんね。

「まあ、たしかに。だって可愛くても悪女だとかかなりマイナスだもんね。

でもさ、美女に甘えられてちよつと我儘言われたら嬉しいんじゃないの？

ほら、小悪魔系の子とかいるじゃん」

そう何気なく言ってみたら、想像外な王子達の反応が返ってきた。

「嬉しいわけ無いじゃないですか！！あんなの女神の皮を被った悪魔ですよ！！」

「たしかにあれば無い。大体、ちよつとの我儘が金掛かりすぎ」

「けどさ、駄目だって頭ではわかってるけど、あんなに綺麗すぎると聞いちゃうよな」

「そうなんだよ。潤んだ瞳で、お願いって抱きつかれると……あれ、反則」

「何、お前もやられたの？」

「お前も！？」

王子達は各自話はずんでいるらしく、声がだんだん大きくなったり、机から身を乗り出している奴まで出てきている。

…… 一体、どこでスイッチ入ったの？こいつら。

「ねえ。私、ちよつと部屋戻っていい？」

立ち上がり、そう彼らに告げる。

だってこのままずっと王子達の話が続きそうなんだもん。

それに逆ハーフラグでテンションあがった分疲れが大きくて、少し部屋で休みたいし。

「お待ちください、美咲様」

「何？」

振り返ると、王子達が一斉に口を一文字に結んで私を見ていた。ちよつと、なんなの？この空気。

さっきまでの彼らのノリは何処にいったのかってぐらい、はりつめて
いる。

「部屋に戻る前に重大なお願いがございます——」

7 さくつと本題に入ります

宇宙人って見たことある？

いや、本物じゃなくて私が言っているのは、宇宙人の写真のこと。ほらモノクロ写真のやつ。

見た事ないかな？オカルト番組とかでたまに映像が流れると思うんだけど。

コートを着た男二人組の間に捕えられた某宇宙人が、両手をその男達に持ちあげられている構図のやつ。

今の私の現状は、なんとなくそれを思い出してしまう。

「あのさー、さっきまで客人扱いだったよね？それに自分で言うのもなんですけど、あんた達に比べるとかなりひ弱なんだっの。どうせだったら、夢のあるお姫様だっこで運ぶとかしてくれない？あんた達筋肉ありまくりだから、私なんて軽々でしょ？」

だってこれじゃあまるで、オカルト番組で良く見る某宇宙人みたいだ。

私はガシッと左右の両手をマッスル騎士二人に拘束され、引きずられるように長い廊下を無理やり歩かされていた。

その場に留まるように両足に力を入れているが、無駄な抵抗で終わっている。

私がそんな風にしながら過ぎていく城の廊下には、絵画が壁に飾られたり廊下の脇にはやたら高そうな壺が飾られていた。

こういうところは、どうせならドレス姿で優雅に歩きたい。

今、Tシャツにデニムというかなりラフな格好なんですけど。

……まあ、魔界の城でも普段着こなだけどさ。

「すみません。お姫様だっこはちょっと。俺、彼女いるんで」

「すみません。俺は好きな子にしかしたくないので」

お前ら、仕事って割り切れよ。

なんでもそうだけど、仕事っていうのはやりたい事だけじゃないだろうが。

「っていうか、あんたら以外と足早いんだね。そんな甲冑着ても走れるなんてさ」

「はい。一応騎士なのでそれなりに体力はありますから。しかし、美咲様は足がお速いんですね。全体的に平凡オーラ漂わせているのに」

「平凡オーラとはなんだ。平凡オーラとは。こう見えても、元陸上部なのよ」

あくまで元。……なので、こうしてあっさり捕まった。

まあ、中学の頃からじゃかなり現役退いているからしょうがないけど。

それに最近全然走ってないし。

「ねえ。逃がしてくれない？」

「無理です」

「なんでよ。大体さ、金も権力も兵もある王子達がわざわざ私に頼みごとをするなんて、絶対に面倒で厄介な物に決まっているじゃん。それに話だけでも聞いてみようものなら、絶対に引き受けなきゃいけない状況に持っていかれるに決まっているし。私、異世界召喚に良くあるオプシヨンの持つてないから、ラスボス級の敵を倒せとかそういう厄介ごとはごめんだよ？」

逆ハー中で浮かれている頭なら引き受けたけど、今は思考はつきり正常化している。だから私はあの部屋から逃げ出した。頼みごとの内容も聞かないで。

そしたらこの騎士達に掴まってしまったのだ。

そんでただ今、元の部屋に連行中。

「大丈夫です！！美咲様なら！！」

「そうですよ。あの魔王様のご婚約者様なんですから！！」

「ちょっと。その自信どっから出てくんの？さっきも言ったけど、異世界召喚したらいきなり今まで使えなかった高度な魔法を習得していて自分最強！！とかそんなテンプレ私には存在してないから。一応言っておくけど、魔界ではカリスマ性を持った絶対的な女神とかでもないよ。女神は女神でも補欠だし」

「補欠でも女神様は女神様ですよ。美咲様になら、きっと出来ますって！！」

「そうですよ。エンベラに行き、あの女を元の人間界に追い返すことぐらい簡単ですって」

騎士のその言葉に思わず顔が硬直した。

……おい。

今、なんかさくつと本題言わなかったか？

8 それが君のいいところ

「美咲様って、結構神経図太い方ですよ」

せっかくだからと窓を開け移り変わっていく異世界の街中の景色を見てたら、嫌みったらしい声をかけられた。

窓から視線をそこに移すと、茶色い短髪に太い眉の精悍な顔立ちの青年が、私の席と対面する席に座っている。

身につけているものからわかるように、彼は騎士だ。

年は私より上の25歳。名前はキースというらしい。

「……こんな事ポンツと投げられれば、誰だって神経図太くもなるっの」

はつきり言って私の声は低く冷めた感じで、相手に対する印象は最悪だって思う。

けど、それもしようがない。

だってさ、異世界召喚されてまだ数時間しかたってないのに、「元女神を自分の世界に還して下さい」って、あの王子どもに追い出されたのよ!?

着の身着のままこの世界に来たから、何も持ってないのに!!

あいつら、ほんとに人任せすぎるわ。

しかも洩る私を無理やり準備していた馬車に押し込めやがって。

幸い着替え等は準備されていたし、一人じゃなく逃走用の見張り兼護衛の騎士も5人もいる。

なんでもエンベラにいるその元女神様があまりにも可愛いらしく、王子達は言う事をなんでも聞いてしまうそう。

そのため、自分のところの妃達からは冷たい目で見られるし、溺愛中のエンベラの王子にも目をつけられるし、自分達の懐事情も寒く

なるで大変らしい。

はっきり言って、知るかつうの。

だって、考えてもみてよ。誘惑にのらなきゃいいだけの話でしょ？

しかも今回は、エンベラの家臣達も絡んでいるらしく、結構大ごとになりそうなんだよね。

その元女神様は金使いまくり、我儘言いまくりの為、エンベラ城の空気は過去最悪。

王子は王子で何も咎めないし、むしろ『可憐の好きにさせろ。さもなくばクビだ』とお前頭大丈夫か？的な発言をしているそう。はっきり言ってそんな奴迷惑だ。

その王子とやらのせいで、私まで火の子被っちゃったし。

「そうじゃなくて、王子達から金をむしり取って来たことです。なんて恐れ多い事を」

「お前、言い方変えろよ……むしり取っていくなんてさ」

「しかも、もっと寄せさせて言って最初の金額の倍以上請求するし。あのお金、庶民が三ヶ月は過ごせる額ですよ」

「こっちの物価分からなかったから多ければいいかなって思ったのよ。それに悪いけど、必要最低限のものは貰うわ。だって私、無一文だし」

馬車に詰め込まれた時、私は王子達にお金の要求をした。

無一文でこの国に召喚されたため、私は手持ちのお金がゼロ。

食事をするのも、宿に泊まるのも全てにお金がかかる。

騎士達が別口で旅費を預かっているとは言え、こいつらに逃げられたら私は路頭に迷ってしまう。

それにどうせこいつらの事だから、エンベラにいたら、即座にあつちで手引きしているやつに引き渡して帰りそうだしさ。

何が起こるかわからないから、もしもの時のためを考えて多めに貰って置いた。

もちろん、魔王達が迎えに来てくれたら借りて使った分は後で返すよ？

魔界とこっちの世界って、共通の貨幣だから使う分には問題はない。もちろん、物価と貨幣価値は違うけど。

「そりゃあ、そうですよね。すみませんでした。なんてがめつくて厚かましい奴なんて思ってた」

「おい」

「しかし美咲様は適応力があるというか、肝が据わっているといえるかなんというか」

「あゝ。最初の魔界への召喚もそうだし、実家のことも結構あったかも。でも、人間誰しも人生波乱万丈じゃない？だから、この件はしょうがないって開き直すことにしたのよ」

「すごいですね、そう前向きにとらえられるなんて」

「前向きじゃないって」

私も全部を受け切れない。

なんで私だけがこんな目に遭わなきゃいけないのって思う時もあるし、今みたいにめんどくさいって思う時もある。

もちろん、目を背けて逃げたくなる時も。

だからすごくないし、前向きな人間じゃないんだけど……

「でも、少なくとも俺より前向きですよ。今わかった気がします。そういう芯の通った美咲様だからこそ、顔じゃなく中見で魔王様に選ばれたんだなって。だって俺ならこんなめんどうなこと、邪魔する奴を叩き切って金だけ持って即座に逃走しますから」

「……お前」

そういう本心は大人なら黙ってる。

今からそれをやらなきゃいけない人間の前で言うな。
引き攣る私とは裏腹に、白い歯を見せながら笑うキースの笑顔がや
けに黒く感じた。

9 ピンチ!?

はっきり言って私にはまったく非がない。

それはもう断言できることだ。

だって、勝手に私のハードルをあげていたのはこの人達なんだから。しかもこの人達全想像力を使用してしまったせいかな、ハードルを山のようにあげやがった!!

——だから別に私は悪くない。

「一体どういう事だ!! まさか、こんなのがあの魔王様の婚約者だというのか!？」

「我らを馬鹿にしているのか!？ こんなその辺に居そうな娘を連れてきて!!」

私の目の前ではおじさんたちが一方的にまくし立てるようにして、

キース達にブチギレしている。

キース達が何度もなだめようとしているんだけど、おじさん達は全く効く耳を持たないらしい。

つか、ヒートアップしすぎじゃね？

身振り手振りして抗議していたけど、今度は体全体で抗議し始め、キース達を扉の前から、壁際まで追い込んだんじゃってる。

キース達もこのおじさん達が身分が高いからあまり強く出れないらしい。

でもさ、いくらお偉いさんだからって、この扱いはないよ？

お茶すら出されてないし。

そもそもここ空き部屋でしょ？ 明らかに。

私たちがエンベラ国につき、案内されたのはこのちゃっちい部屋。8畳ぐらいかな？室内には椅子が2脚だけポツンとおかれているだけ。

最初は謁見の間に案内されたんだよ？

それなのに、王子より早くこの小太りおじさんとやたらダンディな声のおじさん達により、引きずるようにして私たちはここに連れてこられたのだ。

まったく、なんなんだよ。

歓迎されないなら、とっとと帰りたいんだけど。

人のことけなすような奴らの所にいたくないっの。

魔界の人間と違い、こいつらはわかって言っているからムカツクし。

……まあ理解できなくても、毎度魔界連中の神経のなさには腹立つけどさ。

「こんなのって言うのは、少しお言葉が過ぎませんか？美咲様は魔王様の婚約者様であられるんですよ？」

「そうですよ！！美咲様とはまだお話されてませんよね。そんなのじゃ、美咲様の良さがまだおわかりになれませんよね？美咲様は、いずれは魔王様の伴侶となれる尊きお方。そりゃあ、正直俺だって最初はこんなのって思いましたけど」

おいっ！！後半いらないよね？必要ないよね？

私のことを庇ってくれているキース達だが、時々本音が混ざるのがたまに傷。

ここに送り届けたら帰国すると思った彼らだが、意外や意外私の傍にちゃんと付き添ってくれている。

この旅を遂げて友情が芽生えた！？って一瞬思ったけど、んな感動的な展開じゃない。

もちろん、彼らの弱者を守る騎士道から来るものでもないよ。

こいつらの目的はただ一つ——シリウスだ。

女神補欠の私の事を、魔界から魔王達が助けにくるかもしれない。その魔族の中にシリウスもいるはず！！って思考回路になったそう
だ。

シリウスの姿を目に焼き付けられるから、私の傍につきここに残ることにするんだって。

さすが完璧ボディの妖艶姉さんとも言うべきか、人間界の騎士達まで魅了していたようだ。

「本当に期待はずれも良い所だ。こんな小娘だとは」

「魔王様の婚約者というから、可憐様のような人外の美しさの者と思っておったのに。どうするんだ？我々の予定が崩れるぞ」

「まったく、私はただの大学生なんですってば。」

毎回パターン化している私の評価に対し、私はため息を吐き、口を開く。

「そんなに不満なら帰りますけど？」

「帰るとは何事だ！！お前は何しに来たんだ！！」

小太りのおじさんが睨むけど、どうでもいい。

だって何しにきたもないし。

「ねえ、キース達。帰ろう」

ここにいる必要なんて全くない。

あゝ、どうすっかな。めんどくさい。

そんなことをぼんやりと考えながら、扉に手をかけた瞬間、その板

が勝手に開いた。

――は？

顔を上げるとそこには、イケメンと数人の兵が立っていた。

イケメンは短めの金色の髪に鷲のように鋭い瞳、堀の深い輪郭の整った顔立ちをしている。

背も高く、180センチは超えていると思う。

ガタイもかなり良い。

私の世界で見かけたら、建築関係のお仕事ですか？っていうぐらい引き締まった筋肉質だ。

「王子！！」

王子？ああ、たしかに。

おじさん達のうわずった声に、私は納得した。

やっぱ庶民とは、衣服にかける金のかかり方とオーラが違う。

「お前達、ザールとワイを捕えろ」

王子は顎を使っておじさんたちを指すと兵に命令を出す。

「王子。お待ちください。我等は……」

「お前らがやろうとしていた事は全て把握している。言っただ。俺の可憐を傷つける者は許さないと。しかも、俺から可憐を引き離すなんて愚かなことを」

俺の可憐と言っているところから、どうやらこのイケメンが噂の王子らしい。

私としてはもう少し後で会いたかったんだけど。

だって、まだこっちの国の状況も把握してないし。

それなのにこの女神命の王子とあっちゃったら、あきらかに面倒なことになるのはわかってるじゃん。

なんせ、私たちは女神様を元の世界に連れていくことが目的だもの。もちろん、ちゃんと可憐さんの話は聞くつもりだった。

「王子。この者達は？」

「あいつらと同じように牢へ入れとけ」

「はぁ!？」

さしあたって彼は私たちに興味ないらしく、そう言い残すと室内から退出しようと体を反転させた。

「ちよい待て!! なんで私らが牢になんて入らなきゃなんないのよ!! ——……っ!!」

右腕に痛みを感じるぐらいにがしっと掴まれ、思わず苦痛を訴える声が漏れる。

この馬鹿力が!! こっちは一応ただの人間の女だっの!!

10 どの魔王様ですか？

「ちょっと、出さないよ！！聞こえているんでしょ！？看守ーっ！！」

私はガシャンガシャンと格子を揺すりながら、自分が今出せる最大の声量でどなり散らしていた。

普段こんな声出したら近所迷惑のレベルだけど、今はしょうがない。危機的状况に陥っている最中だから。

——あいつら、絶対に聞こえてるくせに！！

こんな大声を出しているのだから、たかが5mぐらい離れている彼の耳には届いているはず。

だが、そんな私のことを彼は一瞥する様子がなかった。

看守は私達のいる牢から、斜め方向にある地上と地下を繋げている階段付近にいる。

左右に分かれ、唯一の入り口を警護しているのだ。

二人とも同じ灰色の衣服に身を包み、数十個はあろうである鍵の束を腰にぶら下げ、槍を右手に持ち、直立不動の体勢を取っていた。

「お前ら、聞こえてるんだろ！？無視すんなっうの！！」

それでもなお無視をし続ける看守に、私はイラつきが押さえられず格子を蹴った。

スニーカーを伝って、じわりと痺れが足に伝達する。

そんな鈍い感覚を味合わなければならぬほど、私は自分の感情を抑える事が出来ない。

こういう時こそ冷静さが必要だというのに、私はただ感情をぶつけているだけ。

わかってはいるけどさ……

どうしても感情で動いてしまう。

これも全てあの馬鹿王子のせい。

私達はあれからあの馬鹿王子の命令通り、この地下牢に閉じ込められてしまったのだ。

しかも、私と騎士分けずまとめて放り込むし。

普通男女わかるだろが。

この地下牢、一旦収容するだけの施設。

罪の重さにより処遇が決められ、そして郊外にある監獄に移送という形をとられるそうだ。

だから逃走を図るなら、今のうちに図らねばならない。

冗談じゃないっの。

何も悪いことしてないのに、こんな目に遭わされるなんてさ。

「美咲様」

「何？」

「あの者達はここを開けることは絶対にしません。少し落ち着いてお休みになられてください」

キースに肩を叩かれ諭されるが、それでもなお私は格子を揺らしながら声を張り上げた。

私だって理解してるよ？

こんな事していても無駄だって事ぐらい。

でも何かしてないと気がまぎれない。

じっとしてて考えるのは、ネガティブな事ばかり。

もし、罰せられたら？

もし、処刑されたら？

そんなマイナスなことがぐるぐる頭の中を回っていく。

はあ……どうしよう。

異世界召喚してから何十回目となるかわからないため息を私はまた吐き出した。

ため息なんて吐きたくもないのに、出るっうの。

何か作戦を考えねばって思うんだけど、浮かんでくるのはありきたりなテンプレばかり。

その一、「トイレ行く」って言ってここから出して貰い看守をボコボコにして脱獄。

その二、色仕掛けで看守を誘惑。

その三からは以下省略で、どれも私にとっては非現実のものなんだよね。

「美咲様。魔界の方はいつごろこちらに来て下さるかわかりますか？」

「たぶん、魔王の熱が下がって風邪が治ったら来てくれると思う」

「は？風邪？」

「……何？もしかして知らなかったの？」

「はい」

他の騎士も見ながら、「あんたたちも？」って聞いたら頷かれた。

「元々私がこっちの世界に来たのは、空間の歪みのせいなの」

「それは伺ってます。茨の扉から来たと」

「そう。知っていると思うけど、あの扉の空間を管理してんのは、魔王。それが風邪ひいちゃって高熱出して寝込んだせいで、魔力が不安定になり、空間に影響しちゃったのよ。そこへ私が護衛もつげずに一人でやって来て、扉からこっちの世界に引っ張られちゃって

人間界に来ちゃったわけ」

それは私の過失だ。

一人のこのこやってきてしまったから。

「では、今すぐに魔王様達が助けに来て下さるのは無理ですね」

「だろうね」

映画や漫画では、いつもこういうピンチになったら、ヒーローが助けに来てくれる。

だけど、それはしょせん物語の中だけ。

現実、そんな都合よくいかず自分でなんとかしなくっちゃいけない。

「意外ですね」

「そう？ 誰だって風邪ぐらいひくでしょ」

私みたいに体質で引きにくい人はいるかもしれないけど、引かないわけじゃない。

「いえ。そういうことではなく、あの魔王様が弱っている姿を人に見せるなんて想像できないんです。やはり美咲様だからでしょうかね。魔王様、いつも威厳にあふれ、威圧的な方ですから。あのお美しさのせいもあるかもしれませんが」

「あゝ、わかるわかる。近づきたくないんだよな。なんっつか、空気が張り詰めていて」

「俺も騎士団で王子の護衛した時に、一回だけ見たけどすごいよな。神々しいオーラがあって怖い」

口々に言う彼らに対し、私は面食らった。
威厳あふれる？ 威圧的？

魔王からは想像もできない言葉だ。

11 暗雲

一応、私は魔王の婚約者という身分だ。

でも、私はただの一般庶民の学生。

だって貴族とかじゃないし、実家も元八百屋で現農家。

魔界に住んでアパート代と食費は浮いているから、バイトも前より減らしたけど、

相変わらずの掛け持ち生活だし。

だから、いくら魔界に住んではいいえ私はなんら変わってない。
所帯じみた所も金銭感覚や食も――

「無礼だよな。美咲様に、このような質素な食事なんて」

「ああ。これじゃあ、本当に囚人扱いじゃないか」

これ、質素なのか……？

キース達の言葉に、私はそれに視線を移しながら首を傾げた。

それは地べたに置かれた私の夕食。

給食みたいに、銀トレイの上に食器に入った食事が並べられている。
丸いパンと白いお椀に入った野菜の入ったスープ、それに小皿にの
ったオレンジ色の果物らしきもの。

もちろん、周りにいるキース達も同じ。

想像していた監獄の食事より、これが思いのほかよかったって印象
を受ける。

だって、果物ついているじゃん。

只今、ちょうど夕食中。

私は格子を見るように壁に背を向け座っていて、みんなは、私を中

心に円を描くように座つたいる。

「いくらなんでも魔王様の婚約者様にこれは……」

「もしかしてさ、魔界で私が毎回豪華なフルコースの食事を食べてると思ってる？」

「違うんですか？」

「違うよ。来客来たら別だけど」

基本的には料理長達がつってくれている、栄養バランスも量も完璧な魔界料理を頂いている。

魔界の料理って言っても、私たちが普段食べているのとなんら変わらないんだ。

……時々、何これ！？って思う物体もあるけど。

もちろん、日本食も食べるよ。

味付けのりとか、たまに買ってきて食べたりする。

結構、魔王にも評判がいいんだ。

ただ、どうしても魔王に毎回止められちゃうものがあるんだよね。それは納豆。

「腐った豆は食べてはならぬとあれほど言っておるだろう」とか言っ
て、取り上げようとするんだよね。

納豆はそういうものだって毎回言っただけだよ。

一回食べさせてみれば理解して貰えるって思ったら、逃げられた。
なんか、匂いが駄目みたい。

だから、魔界の食事食べたり日本食たべたりで食生活は普通なんだ。

「私は普通の食事だよ。お弁当も持っていくし。それに考えてもみなよ、ああいうのばかりなら私カロリー過剰摂取になるじゃんか」

「言われてみればそうですね」

「そうそう。だから――……え？」

私の言葉はそこで止まったしまった。

それは突然耳に届いた女性の悲鳴のような声のせい。

その声は階段を下りてくる足音と共に、だんだんと近づいてきている。

「何……？」

何が起こっているのかと格子に近づいて見てみれば、両端を男達に掴まれ引きずられるようにして看守に引き渡される女性の姿が見えた。

背格好から、年の頃は16〜18歳ぐらいかな？

亜麻色の腰までのびた髪が印象的な、綺麗な顔立ちの人だ。

ただ少し気になる事がある。それは彼女の姿。

少し痛んだベージュの足首丈の半そでワンピースという格好をしているんだけど、それが何か汚れてシミが広がっている。ワンピースだけじゃない。

彼女の顔にも泥が付いている。

それから――彼女の右腕。

手首から肘にかけての一部分が赤くなっている。

「お願いします！！話を聞いてください！！」

彼女の悲痛な叫びが私たちの牢まで響く。

だが、そのような声も看守には届いていないようだ。

何事もないように彼女を引っ張り空いている牢へと連れて行くようにしている。

「国王様との謁見を！！村が……」

なおも彼女は抵抗しながら看守に訴えていた。

一向に聞いてくれない看守に対し彼女の抵抗が強くなっていく。

そのかいあってか、看守の手が離れ彼女の身が一瞬自由に。

だが、彼女は逃げることはできなかった。

それは急に自由になったため、バランスを崩した彼女が地面へと倒れこんでしまったせいだ。

あれ……？

彼女が倒れた弾みで、何処かに隠していたが飛び出してきたのだろう。

長さが20？ぐらいの長方形の紙が、ちょうど私たちの牢の前で止まった。

「ねえ。これってさ……」

「はい。俺も今、美咲様と同じ事を考えてます」

その紙の形状と彼女の発言の内容から、私たちはどうやら同じ推測をしたらしい。

キースが格子の隙間から手を伸ばし、それを掴んだ。

そしてそれを広げさっと中を読んでいくキースの顔がだんだんと曇っていく。

——ああ、やっぱり。

私は自分の想像が当たっていた事に対し、格子を掴んでいた手に力が入った。

12 一難さらずにまた一難（前書き）

ちよつと長めです。

12 一難さらずにまた一難

「魔王様の婚約者とは知らずに申し訳ありませんでした。兄に変わり心からお詫びいたします」

そう言いながら目の前のその青年はただひたすら頭を下げていた。一つに束ねている綺麗な金色の長い髪がさらさらと肩から流れ落ちる。

年の頃は13〜15歳ぐらいだろうか。

着用している王子様的な衣装を着ても、まだ成長途中の体は隠すことはできない。

室内に薬草の独特の香りが漂って来る中、目の前でひたすら謝罪をする彼を見て私は困惑していた。

だってこの子がしたわけじゃないし……

私達がいる白をベースとした室内には、壁際にベッドが感覚をあけて4台並べられている。

そして窓際には、机と本棚。

それからベッドのある壁とは反対側の壁には、仕切りのいっぱいある棚が一面に。

部屋の中央には椅子に座っている女性と白衣を着た老人がいて、老人は彼女の手に包帯を巻いていた。

一方の私達はと言うと、一番邪魔にならない扉付近でそれらをバツクに彼の謝罪を受けている。

「ご無礼をお許し下さい、美咲様」

「いや、貴方が気にする事は何一つないよ。だから、顔あげて？」

私は彼の背に手を添え、これ以上頭を下げる必要な無いと告げる。

だが、彼はそれでも頑なに頭を上げようとはしない。

きつとこれは魔王の名の影響だろう。

私だけなら、こんな風に謝罪を受けることはないと思う。

——酷くいたたまれないよ。

この子は、私達を牢へと閉じ込めた馬鹿王子の弟。

この国では、第三王子だそうだ。

キースが見た手紙は、予想通り良くない内容だった。

それを見て慌てた看守が呼んできたのが、この子ディオ王子。

あの一番上じゃなくて助かったわ。ほんと。看守グッドジョブ。

推測だけど、あの王子来てもたぶん牢から出られなかったし。

「ねえ、ほんといいから」

「そうですよ。美咲様もそうおっしゃっている事ですし、お気になさらずに」

キース達も私と同じ気持ちなのか、私の言葉の後に彼の謝罪を止めようと口を揃えて言ってくれた。

やっぱ居たたまれないんだろうな。キース達も。

「もう、謝罪なさらずとも結構ですよ。俺達はディオ王子に感謝をしているんです。ディオ王子は、美咲様を見て魔王様の婚約者と信じて下さったじゃありませんか。普通、なかなか最初は信じられませんか。だって、この美咲様ですよ？」

「気に病む必要はありません。美咲様はこの通り、平凡オーラ全開の御方。見た目通り普通なんです。だから、俺らもすぐに打ち解けたんですよ」

キース達よ。

打ち解ける事はいい事かもしれないが、打ち解けすぎじゃねえか？
もうちょつと言い方あるだろうが。

この王子にもキース達みたいに軽い所が少しはあればいいんだけど……
たぶん、この子すごく律儀で真面目な性格なのかな。
さてどうするか考えていると、彼の名を呼ぶ、声少ししわがれたが耳に届いて来た。

「――ディオ王子。この娘の治療が終わりましたぞ」

私達の言葉にも頭を上げなかった彼だが、その言葉にはすぐに反応し、顔をあげ視線をその声の方向へと向けた。

彼は揺れる緑色の瞳で白衣の老人の隣りにいる女性を見ながら、唇を噛みしめている。

そして、瞼をゆっくりと閉じると大きく息を吐きだし瞼を開けた。

「……彼女の怪我の容体は？」

「幸い軽度の火傷で済みました。しかし、あの王子には困りましたのう」

白衣の老人は棚から何かを取りだすと、手の平サイズの茶色い紙袋へと入れ、それを亜麻色の髪の女性へ渡す。

たぶん化膿止めか何かの薬かもしれない。

彼女はそれを受け取ると「ありがとうございます」と呟きながら頭を下げた。

「セーラと言いましたね？」

ディオ王子は彼女の名前を呼びながら近づいていく。

セーラさんは、あの時牢へと連れて来られた女性。

彼女が持っていたのは、彼女の村・ランの領主による腐敗した独裁支配について書かれた村民達からの告発書だった。内容は、官人との癒着や賄賂等の内部問題など。

彼女はそれを国王陛下に知らせるべく、この城までやって来たそう
だ。

「――貴方を牢へと連れてきた兵から聞きました。兄達のせいで申し訳ありません」

ディオ王子が謝罪する必要はない。

謝罪しなければならないのは、あの馬鹿王子の方だ!!

あいつ馬鹿じゃねえの思ってたけど、本当の馬鹿だったし。

私が言っているあいつっていうのは、このディオ王子の兄で第一王子・フーガ王子。

噂の可憐様に夢中になって、人の話も聞かずに私達を牢にブチ込んだ男だ。

セーラさんは命からがら村からこの城まで長い道のりをかけて告発書をもって、国王陛下の元へとやってきた。

国王様を探していると、庭に第一王子のフーガ王子と可憐様がお茶をしていたらしい。

これぞ好機とばかりにセーラさんは駆け出すのは普通のこと。

だって、国王様に届けずとも、王子に届ければなんらか対策をして貰えると思うじゃん？

だから、彼女の行動は頷ける。

……でも、その相手があの馬鹿王子だったのが問題だったのよ。

村の事を訴えながらセーラさんが近づいていくと、やっぱり兵が邪魔をした。

その兵と揉み合いになったセーラさんが、テーブルへと転んでしまったのだそう。

もちろん、お茶会というからテーブルにはお茶の入ったポットやティーカップなどがセッティングされている。

セーラさんは、その時腕に火傷を負ってしまったのだ。

テーブルごと地面に倒れた彼女に、噂の可憐様が言った言葉は「どうしてくれるのよ!!」これお気に入りドレスなのに!!」そんな、あの馬鹿王子が言った言葉は「小汚い格好で俺達と可憐の前に現れた上にお茶会を邪魔して!!」その上、可憐のドレスを汚すとは無礼だ」らしい。

それでも、彼女は村を背負って城まで来ている。だからそれでも村の状況について必死に訴えた。

だが、それも聞いて貰えず王子の命令で牢へ。

これは彼女の話と彼女をここに連れてきた兵から聞いた話を合わせた内容だ。

「私が悪いんです!! ですから、頭を上げて下さい!! あの、村の事を助けて下さい。お願いします……」

セーラさんは頭を下げた。

そんな彼女を見つめながら、なんとかしてあげたいと思う。

でも、私にはそんな力がない。

「ねえ、ディオ王子。国王様いつ戻って来るの? さっき外交中って言ってたけど」

「いま早馬を出しておりますが、一週間ばかり様子を見て頂きたいです」

「じゃあ、他に誰かこの件に関して力になってくれそうな人いる? 貴族とか官僚とか……」

たぶん私の勝手な予想かもしれないけど、第一王子は力になってくれないと思う。

ディオ王子は、まだ補助的なことしか仕事できないから力不足って言ってたし。

誰かいらないのか?

「――あ、兄上がいます!!」
王子が力を込め、そう叫んだ。

「第二王子のザラ兄様が!! ザラ兄様は頭も良く武術にもすぐれてますから、きつと今回の事力になってくれるはず!!」

「じゃあ、行こう。案内して？」

「……それが、ザラ兄様はめったに城に居ないんです。兄様にとってここは居心地が悪い場所ですから」

「そうなの？」

「ザラ兄様は城下町生まれなんです。ですから、おそらく城下町のどこかに――」

「は？」

王子の言葉に私たちは言葉を失った。
どこかって何処？

しかも広いよ、城下町って――

13 謎の貧乳仲間登場？（前書き）

また長めです（――；）

13 謎の貧乳仲間登場？

自分で言うのもなんだが、似合いすぎるって思う。

この着こなしは、絶対にあの魔王には出来ない。

私だから出来ると言っても過言ではないはずだ。

そう自分で自負しながらさっそうと風を切り歩き人をかき分けていく。

……とまあカッコよく言ってみたが、別に私はモデルさんのように最新のモードの洋服に身を包んでいるわけではないよ。

実際の私かというと、町中を歩いていてもどよめきもおきなければ、浴びるような視線も受けていないし。

つまり、至って普通の服を着ている。

「やっぱ美咲様はドレスなんかより、そういう平民服がすごくお似合いですね」

「ほんとほんと。最初ディオ王子に貴族令嬢が着るような服をだされた時、これ町で絶対浮くなって思ったけど。良かったですね、この格好なら溶け込めてますよ」

「そうそう。町人Aとしても違和感ゼロですね、美咲様」

「……。」

後ろで口ぐちに勝手にほざいているキース達の軽口に、私はこめかみが引くつくのが抑えられない。

そんな私を隣りにいるセーラさんが、顔を真っ青にしておろおろしながら私を見つめていた。

セーラさん、ごめんね。こんなチームでさ。

「ま、魔王様の婚約者様になんと、無礼な……」 っと言葉も体も震

えないで。

悲しい事に、魔界では日常。

なんかこっちの世界でも日常と化してしまってるけど。

……まあ、私だってそう思ったよ？

この平民服を着こなしているって。

世界が違えど、庶民の私は平民服が似合う似合う。

それは自分でも理解している。

たまにある魔界のパーティーでドレス着るけど、違和感ありまくりだし。

でも、自分以外に言われたくないっの。

私達は結局あれから第二王子を搜索するはめになった。

私の恰好はこの世界では浮く。

だって、この世界にないような服だし。

着替えも同じようなもののようなものを作ってもらったやつ。

だから平民の服を希望したら、ディオ王子に「美咲様にそのような格好はさせません！！」と言われ、貴族令嬢が着るような服を最初差し出された。

それには「おいおい、待て」とさすがに止めた。

だって、さすがにそれを着て街中探せないじゃん。

かなり目立つし。しかも私に似合わないし。

なので、最初の希望通り、平民の服借り着用して今現在城下町を搜索している。

やっぱ、貴族令嬢のドレスより、こっちの方がしっくりくるわ。

「しかし、さすが大国。予想以上の人の数です」

「だよね。これ見つかるのか？」

「ディオ王子が兵を動かして探してくれているし、とりあえず人に聞きまくって私たちも探すしかないわよ。ぼけっと城で待ってられないし」

とは言ってみたものの、城下町のメインストリートの大通りは、多くの馬車や人でにぎわっている。

この中から探すのって、砂粒の中から砂金探すのぐらい大変。携帯とかあれば便利なんだけどなあ。

「どうやって探します？やみくもに探しても無理ですよ。変装しているかもしれませんし」

「変装してても、髪変えたり髭付けたりとかのレベルでしょ？魔法使えないから、顔変えるなんて出来ないと思うし」

「そうですけど、俺達その肝心の顔を知らないんですよ？特徴しか聞いてませんから」

「そうなんだよね。せめて、肖像画でも見てくるべきだった……」キース達のため息混じりに愚痴をこぼし始める中、私は何か策がないか考えていた。

まず、ディオ王子に聞いていたのは三つ。

一つめ、目が深いダークエメラルドグリーン。

二つめ、身長が175センチぐらい。

三つめ、名前がライズ。

どれも、これだ！という決めての特徴が薄い。

いや、ノーヒントって言ってもいいぐらいだ。

もう少し詳しく聞きたかったけど、なんせ緊急事態。

みんな慌てまくりで、「急いで探し出せ!!」だったからなあ……

「とりあえず、目の色がダークエメラルドグリーンで身長が175センチぐらいのイケメンってことは確実だね」

「はっ?イケメン!?!」

「えっ。だって、王子と言えばイケメンが多いじゃん。ああ、イケメンがわかんないか。まあ、つまりかっこいい男とか容姿が良い男って意味」

「……そう言われてみれば、王子って容姿がいい方多いよな」

「でしょ?だから適当に探すなら、その条件にあてはまるイケメンをしらみつぶしに探していけばたどり着くんじゃない?

だって、魔界と違ってこっちの世界でイケメンって結構注目浴びるじゃんか。聞いて探していけば、知っている人がいる可能性大かもよ?

ただ、王子がイケメンだっていう保証はないけどさ」

「さすが、美咲様。ご自分が平凡だからこそ、お考えになられるアイデアですね!!じゃあ、さっそく聞きこみ開始しましょう!!」
おい、キース。なんか別に言わなくても良いフレーズ言わなかったか?

なんかどんどん失礼さが魔族化してるぞ、お前ら。
立ち止まっている私をよそに、意気揚々と歩き始めたキース達の背中を見つめながらなんとも言えない気分になった。

「セーラさん。そういうわけで……って、ええっ!?!」

隣にセーラさんがいなくなってたので、とっさに後方を振り返る。
するとセーラさんと、黒いドレス女性が地面に尻もちをつくような形で倒れていた。

もしかして、ぶつかったのかもしれない。

「大丈夫ですか!?!」

慌てて二人にかけより、手をかそうと手を差し伸べようと右腕を伸ばしたが、思わず動きが止まってしまった。

——え？なぜ長袖……？

セーラさんと共に倒れていた女性は、長袖のドレスを着用している。なぜ？半そででちょうどいいぐらいなのに。

それに、首元にはスカーフがマフラーのように巻かれているし。

他には、黒い帽子を被り、顔がわからないように黒いベールをかけていた。

一瞬疑問が湧いて出て来たけど、きっと事情があるのだろう。

肌を露出させれないとか……

あまり干渉するのは良くない。そう思い、すぐに頭を切り替えた。

「大丈夫？セーラさん」

「あ、はいっ！！」

彼女は立ち上がると、その黒いベールをかぶった女性にふかぶかと頭を下げ謝罪をした。

「申し訳まりません！！ぼうっとしていたせいで！！」

彼女はセーラさんの言葉に首を振った後、立ち上がろうと右足で地面を踏ん張り、立ち上がろうとした瞬間、足でも痛めたのか彼女の体がぐらっと揺れた。

「危ない！！」と思うとつさに彼女の体を支えようと抱きとめるが、思いのほかの重さに抱き止め切れずに彼女と一緒に崩れ落ちてしまう。

抱きとめようとして倒れたため、私の腕は彼女の体に巻きついた状態で地面に仰向けになり、彼女の下敷き状態。

「あれ……?」

彼女を抱きしめている感触に、酷い違和感を覚えた。

貧乳仲間かって思ったけど、これって――

そして仮説が頭の中に浮かんだ時に、野太い男の声と駆け寄ってくる強い足音が耳に届いてきて、その仮説が頭から一旦削除されてしまった。

「――おい、イズっ!大丈夫か!」

14 実際はそうだが、別の可能性だってあるじゃん？（前書き）

またちょっと長めです（*|*；

14 実際はそうだが、別の可能性だってあるじゃん？

「さすが美咲様です。やっぱ、持ってますね」

「やっぱり？ 私も思ったのよ、自分持ってるって」

腕を組みながら頷き感心するキースに、私は強気にドヤ顔を決め、そう強気で言っただけだ。

私ってば、今まで異世界召喚のテンプレオプシオンが付属されてないって思ってたけど、本当は持っていたかもしれない。いや、持っていたな。これは確実に言えること。

だってあの第二王子をこの城下町で見つける確率って、砂粒の中から砂金を見つけるようなものじゃんか。時間がかかるのは覚悟の上な捜索だったはず。

それなのに、ほら――

私は体ごと右方向へと向けて動かし、その方向を見つめた。

その光景に思わず、口角が勝手に上がるのが自分でもわかる。

それはダークエメラルドグリーンの瞳の男が、こちらに視線を固定させながら一歩ずつ後ずさりしていく光景。

残念なことに彼の後ろは壁。

そしてさらに残念なことに、左右には建物が建てられているから逃げ道なし。

悪いけど、逃げられないわよ？

「なっ、なんだよ！？ あんた達！！人をいきなり追いかけて回して！！」

蜂蜜色の髪を持ったその中性的な顔をしたイケメンは、ダークエメラルドグリーンの瞳を揺らしながらこちらを睨んでいた。

私の身長が160センチ。大体見比べてみると、彼は175センチ

だろう。

——ということは、彼も該当者。

彼と出会ったのは本当に偶然だった。

私があつた黒服ドレスの人物を抱きとめていたら、声をかけながら走ってきたのがこの男だった。

「イズ」と黒服のドレスの人物を呼んでいたので、知り合いか何かだったのだろう。

でもそんな事、彼の姿を捕えた私達にはどうでも良かった。

だって、彼がディオ王子に聞いた特徴に該当していたから。

そういう状況なら、「これは捕まえて話を聞いてみなければ!!」
って思うじゃん？

彼が王子の可能性もあるし。

それで話を聞こうとしたら、この人逃げたのよ。もう、激走。
逃げるって事は、何かある!!（イコール）王子の可能性アリ。
っうことで、今までキース達と走って追いかけてきたのだ。

セーラさんも途中まで一緒に走ってたけど、途中で脱落。

もちろんセーラさんに何かあると悪いから、ちゃんと騎士を残して
きた。

「貴方、第二王子のライズって人知らない？」

「……。」

私の問い掛けに、男の瞳が揺れた。

もちろん、それを私達が見逃すはずはない。

決まりだな、これ。

「さあ、一緒に城まで来て貰うわよ？緊急事態なの」
ガシッと彼の手首を掴み、拘束をする。
すると、彼は眉をしかめた。

「なんで俺が？」

「ライズ王子に協力して欲しいことがあるから」

「じゃあ、俺じゃなくライズを連れて行けっ！」

「だから、貴方がその王子でしょ？さっき挙動不審だったじゃない。
状況は深刻だって言ったでしょ？早くセーラさんの村を救わなきゃ
！！」

「ちよっと待てっ！！俺は王子じゃない！！王子は……」

彼の声はそこで途切れた。

なぜなら、彼の声を遮るように複数の人の気配が近づいてきたからだ。

異変に気付き、私もキース達も同じ一点を見て眉をしかめた。

マジかよ……

私たちの後ろは建物があり行き止まり。

そして幅にゆとりを持っているが、左右は建物の壁があるため通行
することは不可能。

だから真正面が唯一、通りへと繋がっている通路。

そこに只今、屈強な男達が塞ぐように横一列に並んでいる。

ナイフを持っている者から、指の間接を鳴らしているマッスルまで
幅広いジャンル。

それを見て、私達が拘束している彼の顔色が明るく変化した。

「お前から来てくれたのか！！」

彼はそう叫び彼らの元へと走ろうとしたが、私とキースに腕と手首
をを拘束されているため、身動きが取れない。

彼の反応から察するに、どうやらお仲間らしい。

「おい！！あんた達、一体ライズに何の用だ？」

ちようど列の真ん中にいたガタイの良い男が、一歩進むとそう口を開いた。

やっぱりこの人がライズ王子なのかと思ったと同時に、自分の置かれている状況を嘆きたくしてしまう。

だって、この状況不味くない？

なんか、やたら空気が張り詰めているし。

もしかして、私たち誘拐犯とかに間違われている？

こんな所でむやみやたらに争いたくない。

それにはつきり言っただの中心にいる人、筋肉質じゃなく筋肉なんじゃないか？ってぐらい腕とかかなり太い。

キースも騎士だから鍛えているけど、全然違いすぎる。

キースの腕2本分の太さだよ、あれ。

はつきり言っただズイ。

これじゃあ、城で捕まった時の二の舞を踏んでしまう可能性あり。

ここは、なんとか穏便にやり込めなければ！！

私は素直に話をするを選んだ。

「火急の用事！！とある村が大変なの、だから王子の手を借りたくて探してたんですよ。今、城下でディオオ王子も搜索隊を出してライズ王子を探しています」

「そうかい。じゃあ、その証拠を出せ」

「はいっ！？」

「出せないのか？」

「出せないも何もそんなのないから！！もしかして、ライズ王子に

害のある人物だっと思われてます？私達、別に怪しい者じゃないですよ！？」

「そうですよ。こちらのお方は魔王様の婚約者様で、俺達はダルサ国の騎士。今は美咲様の護衛中です」

「……魔王様の婚約者だと？」

「はい。信じられないかもしれませんが、本当のことです。美咲様は魔王様の伴侶となられる尊きお方。ですから、ご無礼のないように」

キースの言葉に、全員の視線が私に集中する。

なんか、見定められているようで嫌な気分。

それはほんの数秒もかからないぐらいの時間だったけど、そう感じた。

「——おい。こいつらを捕えろ」

「はあ！？なぜ！？」

悲鳴に近い声を上げる私をよそに、キース達は「やっぱりか……」という言葉をつき出した。

もしかして、この平民服が原因か？

そりゃあそうだよ。魔王の婚約者が平民服着てるって普通思わないはずだもの。

事情知っている魔界の連中じゃないし。

やっぱり似合わなくても、あっちの貴族令嬢の方にすればよかったわ。

制服やスーツって、着用しているだけでびしっとなるしね。

「お前が魔王様の伴侶だと？嘘つくなら、もっとマシな事を言って誤魔化せばいいものを。もしかして、お前魔王様をご覧になった事がないのか？お前があの子——可憐のような容姿なら納得できるが、どう考えたって無理だろ」

「ちよっ！！またそういう話かよっ！！」

鼻で笑った男に対し、私は思わず突っ込んでしまう。

私はどうしても、そこで躓いてしまうのか？

毎度毎度のことながら、はっきり言ってかなり面白くない。

「待って下さい！！美咲様はこんなですけど、本当に魔王様の婚約者様なんです！！嘘だと思うならダルサ城の王子に確かめて下さい」

「わかった。だが、あんたらの身柄は素性が明かされるまで預からせて貰うぞ」

「そんな時間はありません。さきほど美咲様もおっしゃいましたが、火急の用事があるんです。どうか、俺達を信じて貰えませんか？たしかに美咲様はあまりに平凡すぎて町を歩いてても、見失うぐらい溶け込めるぐらいのレベルですよ。一般的に考えて魔王様の隣に立たれる方は、魔王様と一緒にならんでも引けをとらないほど美しい方だともうかもしれません。ですが魔王様はそのような姿形は関係なく、心の目で美咲様を見染められたのです」

キース。微妙なフォローありがとう。

欲を言えば、もう少しオブラートに包んで欲しかったな。

だが、キースの言葉は彼らの心に届かなかったらしい。

男の再度の指示に、その仲間達が一斉に私たちの方へ走って向かってきた。

「待って！！信じてよ。本当に私は――」

「おい、貧乳っ！！」

そう、本当に私は貧乳。……って、おいっ！！

突如として耳に届いてきたその貧乳という聞き捨てならない言葉に、私は眉間に力が入った。

「ちょっと！！誰よ、今貧乳って言った奴！！セクハラ！！」

「いつ、いや。俺じゃない!!」

ついキツク睨みすぎたのか、男は慌ててぶんぶん首を横に振った。

しかもなぜ私が貧乳と知ってる？

わからないじゃないか、着やせしているかもしれないし、胸をさらに巻いているかもしれない。

いろんな可能性があるから一見して胸がないように見えるかもしれないが、実際は大きかったって事もあるはず。

……まあ、私は自然^{ナチュラル}に地ですが。

「じゃあ、誰！？そっちから聞こえたわよ」

「誰って言われても……おい」

男は周りの仲間を見渡すが、みんな首を横に振っている。

幻聴？いや、確実に聞いた。

こいつら、すつとぼけてんのか？

「——貧乳、お前勝手な行動してんじゃねえよ。魔王様にご迷惑とご心配をかけさせやがって」

一人ずつ尋問でもしようと思っていると、また再度貧乳という反応せずにはいられないフレーズを含んだ言葉が耳に届いてきた。

もちろん、さっきと同じ人物の声。

だだもう一度あらためて聞いてみると、どっかで聞いたことあるような気が……

私がなんとか思いだそうと考えると、モーゼの十戒のように海が左右に分かれるかの如く、急に男たちが左右に避け始めた。

そして開かれた中心部に見えてきたのは、男女二人組。

彼らを見て、私は心臓が止まるかと思った。

だって、彼らがここに来るにはまだ早いはずだから。

15 ひとまずお先に合流しました。

「ちょっと、キース！もうちょっと早く助けなさいよ！！」

私は地べたに座り、全身を使って何度も深呼吸をしながらキースを睨んでいた。

私の呼吸はもう乱れまくり。

まるで100メートル走何本も走った気分。

だが、そんな私の抗議もなんのそのとばかりに、残念ながら彼には伝わってなかったようだ。

キースの目線は、がっちりと私の隣にいる人物に固定されていて微動だにしていない。

もうそれは瞬きすら許さないとばかりに、目を大きくカツと大きく見開いている。

ちょっと、私の存在無視ですかー？

まあ、無理ないかもしれないけど……

だって私の隣の人物は、なんて言ったらって魔界の妖艶姉さんこと・シリウスだから――

一方のシリウスはというと、キースの視線を気にしていないのか、それとも気づいていないのか、それは定かではないけど、「ごめんね、美咲」と言いながら私の背中を何度も摩ってくれていた。

そしてシリウスと私の丁度中間ぐらいの真後ろでラムセが、まだグダグダと何かお小言を言っているが、聞きたくないのであえてスルーしておく。

「キース。シリウスに夢中になるのも理解できるよ？でも、人の話もちゃんと聞いてくれない？」

「……ああ。申し訳ありません、美咲様。つい、『チッ、なんだよ、こいつ。羨ましすぎる』という妬みの感情ばかりが先走りまして。言いにくい事なのですが、あの時は美咲様の事なんて眼中にありませんでした。まあ、今さら別にそんな細かい事いいじゃないですか。本望ですって、ほんと。だって、シリウス様の胸に顔を埋められたんですよ？」

「キース。申し訳ありませんでしたという言葉は、たしかに謝罪の言葉だ。だが、それを述べれば謝罪の言葉になると思ってるならば大間違いだからな」

誰がそこまで欲望丸出しの答えを期待したと思う？

してないだろ！！大人なら、時には相手を思って自分の心を偽れって！！

そしていくら憧れの生シリウスだからって、少しは助けを求めている。たこっちを気にしてよ。

ラムセが止めてくれなきゃ、マジで窒息するかと思ったっうの。

ついさきほど、あの左右に分かれた男達の間を優雅に歩いて来たのは、ここにいるラムセとシリウスだったのだ。

そう。あの私を貧乳呼ばわりした声の主は、ラムセ。

まず助けに来ての第一声が貧乳とは、相変わらず良い性格をしている。

私と魔界の誰かが接触するのは、実に数日ぶり。

だが、その再会は感動の涙で濡れるものではなかった。

それは貧乳呼ばわりされた私がブチギレ、魔界に居た時と同じように二人していつものようにお互い口喧嘩が始まってしまったから。だがそれもほんの数秒で終了。

それは私の顔が柔らかい弾力のある物に顔を押しつぶされるように

して埋められてしまい、私は言葉を発する事が出来なかったせいのためによる。

最初はなんだか、状況がよくわからなかったのよね。

だって胸ってあんなに弾力があって柔らかいんだよ？ いや、知らなかった。

念のために一応最初に断っておくが、私にも胸はあるさ。

だがら、ある程度は分かっているつもりだった。

でもほらなんていうか、私の胸と違ってシリウスの胸って大きさ――……ああ。なんか私、今自分で自分を傷つけてしまった気がした。考えるの辞め。中止。

ともかくにも、数日ぶりの感動の再会で感極まったのか、シリウスが「美咲」。本当に無事で良かったわ」と言いながら突然私を胸にかき抱かれてしまったのだ。

「いやあ。巨乳って凶器になるね。さっきは窒息するかと思ったわ」

「ごめんね、美咲」

「あ、うん。もう平気。平気だから気にしないで」

あー。やっと呼吸が元に戻った。

少しの休息と深呼吸に私はやっと一息つけたので、手の平を合わせて謝るシリウスにそう答えた。

すると、その後間もなくしてキースが私に声をかけ、肩を叩いてきた。

「美咲様、美咲様!!」

「何？」

「紹介して下さい」

「……ああ」

そうか。一応軽く紹介しておくか。

詳しくは、他の騎士達が来てから話せばいいし。

あいつらにも紹介しなきゃ。きっと驚くだろうな。

私は対面させた時を想像して、少し笑いがこぼれた。

「えーと、ラムセにシリウス。こちらの騎士は、私の護衛をしてくれているキース。ダルサ城の騎士なの。それで、キース。こっちは知っていると思うけど、ラムセとシリウス」

私は立ち上がると、お互い顔を合わせるように立っているキースとラムセ、それにシリウスの間に立ち、交互に紹介した。

「うちの補欠が世話になったな」

「本当にありがとう。ここまで守ってくれたのって、坊や一人？」
坊や……？

シリウスの言葉に、私は首を傾げた。

シリウスの視線の先にはキースがいることから、相手はキースという事がわかる。

たしかに年齢がかなり差があるけど、坊やって言うには、ちょっと……

そんな事を考えていたが、キースが裏切りをしてしまい、思考が途中で停止して訂正する事が忘却の彼方へ消えて行ってしまった。

「はいっ！！俺が一人で美咲様をお守りしておりました」

キースはびしっと背筋を伸ばし、直立姿勢のまま、キリッとして表情でシリウスにそう話した。

ちよつと、あんたまさかの裏切りっ！？

そんなに、シリウスに自分を良く見せたいのかっ！？

アルトとか他の騎士もいたじゃん！！

「ラムセ、あんた一人じゃなか——」

他の騎士のためにもすぐさま否定の言葉を口に出そうとしたら、それよりも大きな声でラムセが言葉を発してしまった。

そのため、私の言葉は途中で遮られる。

こいつ、絶対タイミング見計らっただろ……

「シリウス様。魔王様も一緒ではないのですか？」

「魔王様は『志乃様』に看病して頂きながら、治療中よ」

「では、どのようにしてこちら側に？」

「志乃様に協力していただいて、志乃様から『アルサス様』にお願いしたの。アルサス様を動かせるのは、志乃様だけだから。本当ならすぐに美咲を助けに行きたかったんだけど、

茨の扉は魔王様の影響で不安定のため、私達の魔力じゃ空間を整える事が不可能。だから、アルサス様に一時的に空間の安定をお願いしたのよ。

魔界で魔王様に匹敵する時までとはいかないけど、強い魔力を持つのはアルサス様ぐらいですもの。現役を退いてもあの方の魔力は素晴らしいわ」

「ねー。さつきから出てくる、志乃様とアルサス様って？」

「お前、知らねえのか？魔王様のお父上様とお母上様だろうが。つまり、前魔王様とその妃様」

「……ちよつと、私、初耳なんですけど」

私が魔界に住んで一年以上経つ。

その間、魔王も周りの人からそんな話聞いたことなかった。

どうしよう。私、挨拶してないよ……城で暮らさせて貰っているのに。

「ちよつと、これ無事に終わったら連れて行ってくれない？挨拶しない」と

「ごめんね、美咲。魔界の制約で魔王様の妻となる人は、相手方のご両親とは結婚式後じゃないと会えない決まりがあるの」

「何、その決まりごと」

「かなり大昔に嫁姑問題が勃発したからみたい。でも、安心して。アルサス様は志乃様以外にはとても厳しい方だけど、反対に志乃様はお優しい方なの。時々珍しい異界の服を着ていらっしゃるけど、とても可愛らしい方なのよ。なんだったかしら？異界の服で……そうそう、セーラー服！！あれがとても良くお似合いになって」

「ちょい、待てっ！！」

今、なんか聞き逃せないフレーズが耳に入ってきたぞ。

セーラー服って言わなかったか？セーラー服って。

魔王のお母さん女子高生説などいろいろと頭の中で憶測が飛び交っていたが、「ライズ！！」と周りが王子の名を呼び急に騒がしくなったので、私は一旦それを考えるのを放棄し、

視線をシリウスから、屈強な男たちがいる左方向へと変えた。

あの人って……――

視界に入ってきたのは、男たちが半円を描くように一人の女性の周りに扇状に集まっている光景。

その中心は、あのさっき遭遇した黒ドレスの女性だ。

彼女は私の視線に気づいたのか、ふと顔を上げこちらを見たかと思うと、急に跪いた。

その彼女の行動に、周りの男たちも同じようにして跪き始める。

えっ！？一体何事っ！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3549o/>

その者を追い返せ

2011年12月2日20時46分発行